に富み、これによって全体としても豊富な器種構成となっている。中でも出土量の多い相馬産陶器は茶碗類を主とした小型の器種が揃っている。堤産陶器は鉢・擂鉢・甕といった比較的大型の器種と焙炉・ひょうそく・灯明皿のような雑器類の出土が多く、皿・碗などはない。

陶磁器以外にも軟質陶器・土師質陶器・瓦質陶器があり、これらによって作られた火鉢・コンロ・鉢・灯明皿などⅣ期後半の器種構成をさらに豊富にしている。

松木遺跡の各時期の構成は、以上のような変遷をしており、15世紀～16世紀後半を空白としている以外はほぼ連続的に遺物が出土している。

Ⅰ期は他の平安期の集落と比較して特に差異は認められないが、Ⅱ期は常滑産陶器の大量の中国産磁器の出土、茶陶類・香炉の出土など一般の農民層には結付かない遺物がある。Ⅲ期も茶陶器類や香炉を含む美濃産や唐津産の多数の陶器が出土し、Ⅳ期はさらに相馬・堤産陶器や肥前産磁器（何揃えかの陶磁器含む）を大量に出土し、一般的な農民・町民層とは区別するべき状況を呈している。他集落の調査例が少なく、またこの地域に直接係わる文献資料も無いためにこの差異の結論付けは出来ないが、調査例の増加により松木遺跡の住民層の解明が、今後の課題とされる。

2．松木遺跡出土の陶磁器について

松木遺跡では、中世から近代にかけて多量の陶磁器が出土した。これまで、仙台市内あるいは県内でもこれほど多くの出土例はなく、特筆すべきでことであろう。

筆者は本遺跡出土陶磁器のすべてを見る機会を得、他の遺跡と比較してほしいとの担当者の依頼があった。しかし、個々の遺物の検討やそれらが遺構内でどのように組合うのか充分に検討が行なえなかったため、観察の結果気付いた点を中心に述べてみたい。

まず、松木遺跡を理解するに当たって、その社会的背景を素描しておきたい。平安時代末期には、名取・広瀬両河川流域は文治五年の源頼朝の奥州合戦の舞台となった所であり（「吾妻鑑」）、この時平泉側には名取郡司・熊野別当などの有力者の存在が知られている。合戦後は関東武士が移住してくるわけであるが、名取郡には和田義盛一族が、後に三浦義村一族そして最終的には執権北条氏の所領になったと言われる。続く南北朝時代には争乱が合い次ぎ、ほとんど無主に近い状態であったらしい。また、柳生の西方高館丘陵上や裾部には熊野三社が平安末期頃に成立し、関東武士の移住によって信仰が飛躍的に発展する。室町時代以後は、伊達氏の勢力が次第に浸透し、戦国期以降には伊達氏の家臣たちが次々と居住したらしい。[(1)] 松木遺跡はじめ名取郡内の遺跡は、上述のような社会背景・状況を抜きにしては語れないであろう。

中世（Ⅱ期）の陶磁器は、在地の白石窯系陶器を主体に常滑・渥美・瀬戸・中国（青磁・白磁）などが陶磁器組成を構成している。一方在地の土師質土器は皆無に近く、同様の現象は今泉城跡[(2)]・戸ノ内遺跡・南小泉遺跡[(3)]などでも指摘できる。これは、あるいは木器類の普及と表裏をなすものかもしれない。いずれにしろ、名取川下流域の遺跡における陶磁器組成は共通していると言えよう。松木遺跡では、これまで知られていないいくつかの特徴が指摘できる。白石窯系の甕に菊花状のヘラ描き模様を持つものや、陶製円盤の存在、中国陶磁器に盤や擂座のある鉢の存在など、器種や特徴に差を見い出だし得る。また、白石窯系陶器と中国青磁連弁文碗の共伴する土壙など、今後在地陶器の編年を検討するうえで貴重な資料も散見される。

ところで、松木遺跡では15世紀から16世紀後半の陶器がないようで、この時期は空白期となるらしい。この点、今泉城跡や南小泉遺跡とはやや傾向を異にするようである。中国染付や国産陶器は確認できない。再び遺構・遺物が確認できるのは、16世紀末（Ⅲ期）以後である。ここに１つの画期を求めることができよう。

江戸時代には、大規模な屋敷があったようで、明治の地形図を見ると遺跡の周囲には約300m四方の方形の道路が巡っており、屋敷を区画する施設を反映していたものと推察される。今回報告された陶磁器類をみても、一般農民とは異なる武士階級あるいは富裕者層の居住地と見るのが妥当のようである。柳生地区は、藩制時代には和紙の生産が盛んであったといわれ、松木遺跡の位置は近年まで庄家を務めた人の屋敷であったことは示唆的である。ちなみに、柳生和紙は慶長年間頃に伊達政宗が呼び寄せた職人によって始められたといわれ、寛政年間頃が最盛期だったという。松木遺跡北側の柳生寺は、和紙造りの指導者であった小西利兵衛の菩提寺であり、碑が残っている。

さて、Ⅲ期の陶磁器の特徴は、美濃が主体をなす点は仙台城三ノ丸跡[(4)]や今泉Ⅳ期の成果と同様である。美濃製品をみると大窯Ⅴ期の黄瀬戸や灰釉製品は含まないようで、大窯Ⅴ期末以後の志野・灰釉の皿類が最も古いようである。志野焼の出現は、天正年間以後と考えられており、Ⅲ期の上限を確定することができよう。また、この時期の胎土目をもつ唐津製品がわずかに出土[(5)]している点からも裏付けできよう。仙台城三ノ丸跡（Ⅰ期）では、上述のもの以外に信楽（壺）、備前（水指・徳利）、中国染付（碗・皿）、塩焼壺、土師質皿、瓦質鉢類などが出土しているが、松木遺跡では皆無であり、今泉城Ⅳ期の陶磁器組成に近い。主体を占める美濃製品についても、仙台城とは質や器種に大きな隔たりがある。これは、大名（城主）と中級武士（家臣）という階層差を明確に反映しているものと理解される。

Ⅳ期の陶磁器は、県内では最も豊富である。このうち、Ⅳ期前半の資料は比較資料がほとんどない。わずかに仙台城三ノ丸跡（Ⅲ期）、今泉城跡（Ⅴ期）などにある。例えば、三ノ丸跡に比較してみると、産地の差はほとんどなく、器種に差があるようである。特に、三ノ丸跡碗

類や擂鉢などの供膳具、調理具が豊富で、三ノ丸（米蔵）との性格の差を明確に示すものであろう。さらに、肥前磁器の染付碗には蓋付のものが出土しているなど、現在仙台城跡にはない特徴も指摘できる。

松木遺跡を最も特徴づける陶磁器はⅣ期後半のものであろう。

その特徴は出土量もさることながら、「何組揃い」というセット単位で把えられる磁器資料が多く存在する点である。この特徴は18世紀代（Ⅳ期前半）の資料にもみられるが、大半は後半期のものである。３組単位で把えられる資料が多いが、これはいずれもＳＲ－１・1c層より他の多量の陶磁器と共に出土している。また、17世紀初頭前後（Ⅲ期）の陶器が混在していることも特徴である。このＳＲ－１出土の遺物には実測可能な資料が実に多く、奇異な印象をうける。陶磁器類はさらに調査区外にも続くようで、これは単なる破棄ではなく一括破棄あるいは埋納されたと理解したほうがよいのかもしれない。このような理解が許されるならば、Ⅲ期やⅣ期前半の陶磁器は伝世品と考えられ、Ⅳ期後半にＳＲ－１へ一括破棄あるいは埋納されたと考えられるのである。その理由は不明であるが、Ⅳ期後半は明治後半頃と考えられ、仙台周辺では無産無職の士族が増え、農村部では地租改正の名の元に改悪がなされ、むしろ封建体制が政治的に強化されたといわれる。また、税制改革では農村部の地主層などに打撃を与え、資産隠しなどが横行した。明治30代年[(6)]には大凶作に見舞われている。ＳＲ－１の陶磁器は、この様な社会状況と直接・間接的に拘っているように思えてならない。

以上、松木遺跡の陶磁器の観察結果に基づいて気付いた点を述べたが、各時期における産地別の特徴と問題点や他遺跡との比較など指摘できなかったことなど不十分な点があり、概略的な素描に留めざるをえなかった。松木遺跡の陶磁器は、専門家の鑑定を受けていない点で不安がのこるが今後も個々の資料に立返って検討すべきであると考えられる。松木遺跡の評価を巡って今後とも注目していきたいと思う。

注　　記

(1) 東北歴史資料館：「名取の里　熊野信仰と一切経」　1980

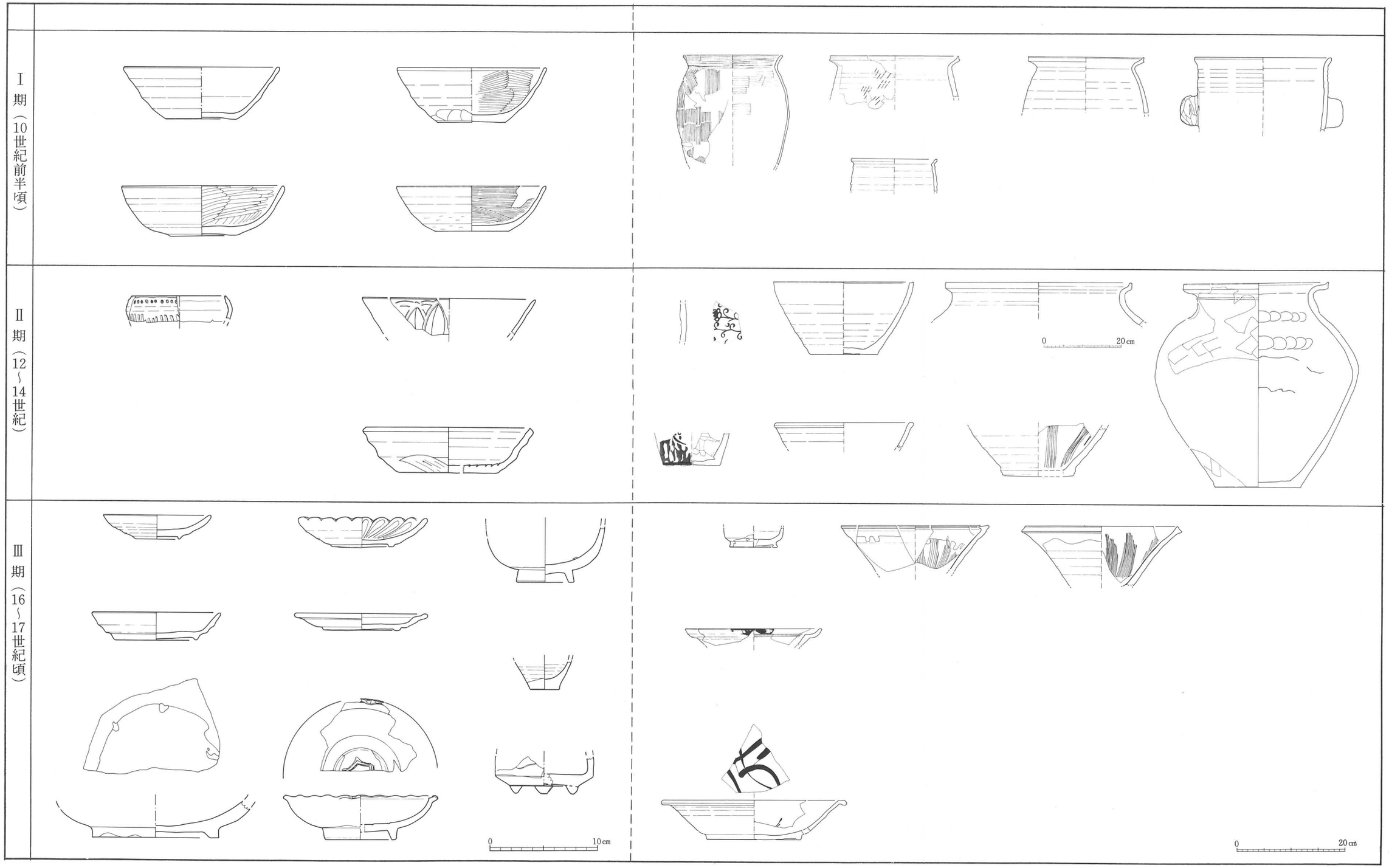
(2) 佐藤　洋・斎野裕彦・山田しょう：「今泉城跡」　仙台市教育委員会　1983

(3) 結城慎一・佐藤　洋：「南小泉遺跡　都市計画街路建設工事関係第３次調査報告」　仙台市教育委員会　1984

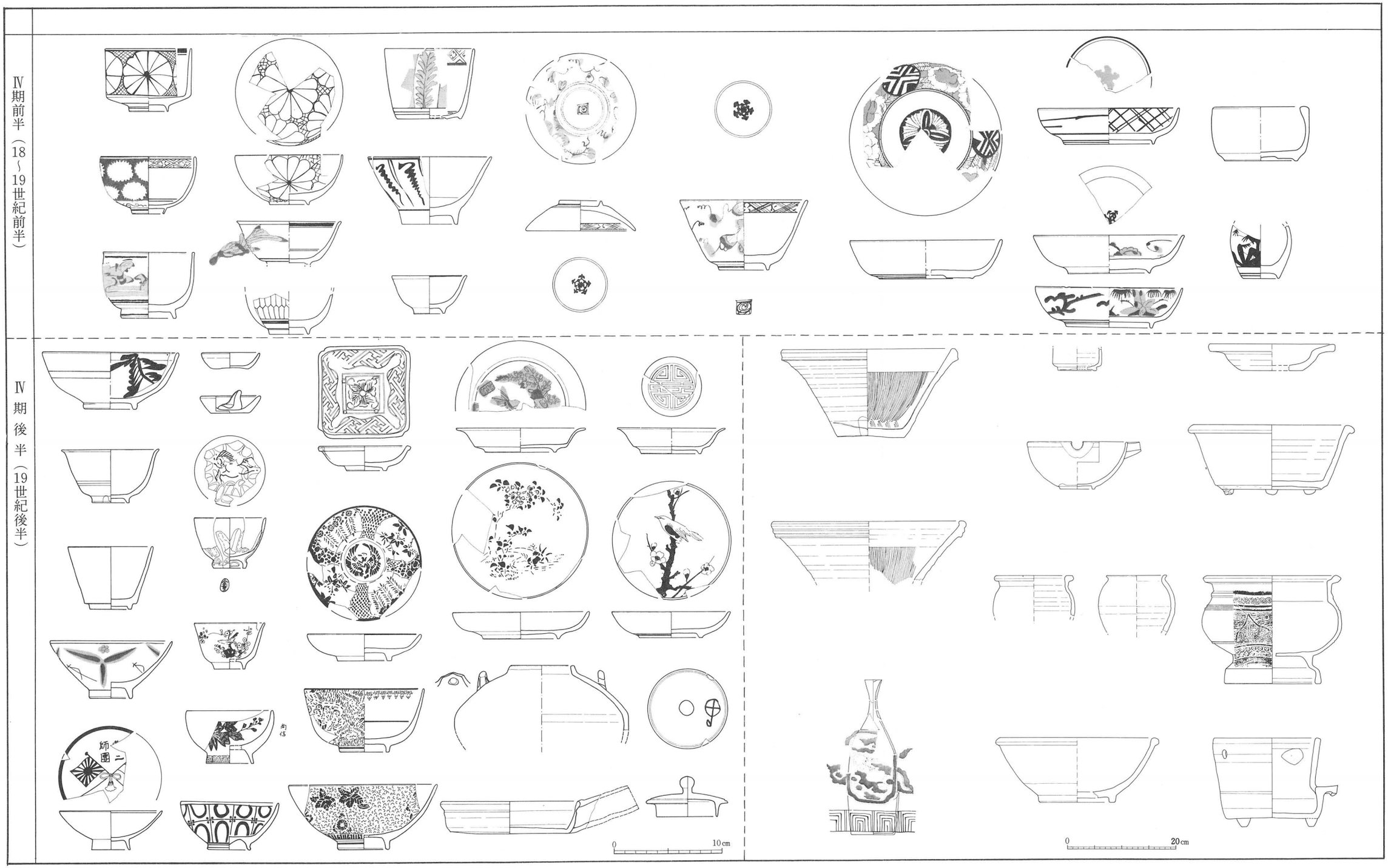
(4) 結城慎一・佐藤　洋：「仙台城三ノ丸跡」　仙台市教育委員会　1985

(5) 井上喜久男：「大阪城三の丸における初期近世窯の様相」　『大阪城三の丸跡２』　大手前女子大学史学研究所　1983

(6) 高橋富雄：「宮城県の歴史」　山川出版社　1980



第130図　松木遺跡出土土器変遷図（1）



第131図　松木遺跡出土土器変遷図（2）